

シエラレオネ紛争

—その特徴と「若者」に対する再解釈—

岡野 英之 *

I. 問題の所在

「武力紛争は、戦況や武装勢力上層部の意思決定、国際社会の介入など政治プロセスだけではなく、紛争を取り巻く社会の状況との相互作用にて展開するのではないか。」

多くの武力紛争が長期化するにつれて悪化、泥沼化している。本稿で扱うシエラレオネの場合、紛争が開始した当初、反政府組織、革命統一戦線 (the Revolutionary United Front: RUF) は 100 名前後のメンバーしかいなかった。しかし、その後、RUF をはじめ国軍の兵士数の増大、武装勢力の増加、武装勢力の離合集散という劇的な展開を見せている。このような展開は何故おこるのだろうか。その疑問に対して、これまでの研究は、戦況や武装勢力の指導者の意思決定、国際社会の介入という政治プロセスを用いて説明してきた。しかし、それだけでは紛争の展開を十分に説明することはできない。なぜなら、武装勢力は、紛争を勝つために多くの市民を兵士として取り込んだが、彼らにより、行動が規定されている場合があるからである。

紛争期において RUF や国軍などの武装勢力に兵士として登用された市民は、ほとんどの場合「若者」である。紛争において、「若者」が要因のひとつになっているという研究は多数存在する。そこでは、「若者」は、経済的に一人前ではなく、社会から疎外されている存在として描かれている。それらの解釈によると、「若者」とは、子供ではないが、一人前の大人ともみなされない社会階層の底辺に位置づけられた存在である。

紛争の展開は「政治プロセス」と「紛争を取り巻く社会の状況」の相互作用であるという疑問を本稿は持つ。そして、「紛争を取り巻く社会の状況」から紛争の展開を

* 国際関係学科非常勤助手

考察していく。その中でも、本稿は、考察の対象を RUF 内の「若者」の社会に絞った。その理由として、紛争は、反政府組織を中心にして展開しており、RUF の「若者」の行動は紛争の展開に大きく影響を与えるのではないかと考えたからである。また、考察の対象として、紛争半ば（1994 年－1997 年。後述の「紛争二期」）を中心している。その理由は、この時期、RUF の性質が紛争初期とは異なる様相を見せたからである。

本稿の目的は、どのように「若者」が紛争の展開に対して影響を与えているのかを考察し、シエラレオネの紛争に対して新しい解釈を提示することで、冒頭で示した問題意識に答えていくことである。

II. 紛争の展開と特徴

1. 紛争の展開

シエラレオネの紛争は 1991 年 3 月の RUF による隣国リベリアからの同国侵攻から始まり、その終結は、2002 年のカバー大統領による紛争終結宣言であるとされる。紛争を通し、RUF は、誘拐により兵士を拡大し、市民に対して暴力や略奪を繰り返した。また、当初は、リビアなどによる革命イデオロギーの影響が見られたが、その後の和平交渉に行う主張の凡庸さや、紛争の展開から判断すると、イデオロギーやビジョン、規律さえ有さない武装集団になっていったことが窺える（落合, 2003, p.399）。本節では、そのような RUF の変容を踏まえつつ、紛争を概観していく。シエラレオネ真実和解委員会 (Truth and Reconciliation Commission, Sierra Leone: TRC) は、政治的、軍事的な情勢や事件から紛争を 3 期に分けており (vol.2, p.9)、本稿もこの分類に従うことにする。

まずは第一期を概観していく。1991 年 3 月の RUF による侵攻により紛争は開始したとされるが、侵攻時の RUF は、100 名前後と少数であり、特定の指導者を持たなかった。やがて、国軍の伍長を経験したことのあるフォディ・サンコー (Foday Saybana Sankoh) が RUF の指導権を掌握していった（落合, 2003, p.339）。内戦の発生当事は、モモ政権の腐敗により、RUF は支持を得ていた。また RUF も政治的スローガンを持ち、首長、商人、村の年長者など体制側と関係する人物を計画的に殺害しており、反体制の人間に支持されるような戦闘を行っている (Richards, 1996, pp.7-8)。

紛争勃発時、政権についていたのは全人民党 (All People's Congress: APC) のジョゼフ・モモ (Joseph Saidu Momoh) である。だが、1992 年 4 月に軍事クーデターが発生

し、モモ大統領に代わり、バレンタイン・ストラッサー (Valentine Strasser) 大尉が国家元首に就任し、その政権は国家暫定統治評議会 (National Provisional Ruling Council: NPRC) と名乗った。このクーデターは給料未払いに不満を持った一部の国軍兵士が起こしたものである。NPRC 政権は国軍の兵力を拡大した。これにより RUF が劣勢となり、交渉の姿勢を見せたが、NPRC 政権は、軍事的優勢を保っていたため拒絶をする。ここまでの期間が第一期で、1991 年から 1994 年までの期間である。この期間の特徴として、領土獲得合戦が展開されていることがあげられる (TRC vol.2, p.9)。

第二期は、RUF の戦略転換をその始まりとする。1994 年末から、RUF は支配地域を広げる戦略から、ゲリラ戦を用い、攻撃してすぐ消えるという戦法を取るようになる。この戦闘により、1994 年から 1995 年初頭にかけて RUF が優勢になったため、RUF は交渉の姿勢を見せなくなる (International Crisis Group, 2001)。1995 年に、その状況を打開するため、ストラッサー政権は、南アフリカの民間軍事企業エグゼクティブ・アウトカムズ社 (Executive Outcomes: EO) と契約をし、国軍の訓練や情報収集などの業務を委託し、再度形成を逆転させた。だが、1996 年 1 月に軍部によるクーデターにより、再度政権は交代することになる (落合, 2003)。

このクーデターで国家元首に就任したジュリアス・ビオ (Julius Bio) は、ストラッサーがすでに表明していた民政移管のための選挙を予定通り実施した。この選挙により、1996 年 3 月にシエラレオネ人民党 (Sierra Leone People's Party: SLPP) のアハマド・テジャン・カバー (Ahamad Tejan Kabbah) 大統領が選出された。

国軍を信用していないカバーは、地方において自衛組織として組織された民兵カマジョー (Kamajo) を国軍の代わりに重用し、EO によるトレーニングも受けさせた (Ferme and Hoffman, 2004, p.76)。同年 11 月、カバーは、RUF との間に和平合意を結ぶが、その後も戦闘状態は継続された (その理由として、RUF は和平合意に対して真剣ではなく、EO という脅威を取り除くためであったことが推定されている) (International Crisis Group, 2001, p.11)。そうした中、1997 年 3 月ナイジェリアを訪れていたサンコーが、銃器不法所持の容疑で拘束されるという出来事が起こった。1997 年 5 月、サンコーの身柄引き渡しを求める一部の国軍兵士が RUF と共謀し、クーデターを起こし、カバー政権が打倒される (落合, 2001, p.209)。ここまでの、第二期とされる。

第三期は、このクーデターから始まり、紛争が終結するまでである。1997 年のクーデターで誕生したのが、国軍革命評議会 (the Armed Forces Revolutionary Council: AFRC) のジョニー・ポール・コロマ (Johnny Paul Koroma) 政権である。だが、このクー

デターは、民主的に選出された政権を覆したとして、国際社会やシエラレオネ国民から非難された (International Crisis Group, 2001, p.11)。そのような中、西アフリカ諸国経済共同体停戦監視団 (ECOWAS Cease-fire Monitoring Group: ECOMOG)⁽¹⁾ は、シエラレオネに対し軍事介入を行い、コロマ政権と対峙した。両者の間に民政移管についての交渉はあったものの、結局、1998年 ECOMOG がコロマ政権を打倒し、AFRC/RUF は首都フリータウンを追いやられ、カバーは大統領職に復帰した。

その後も、1999年1月には、政府側 (国軍、ECOMOG など) と RUF/AFRC の間でフリータウンをめぐる攻防戦が繰り返されるが、1999年7月の新たな和平合意 (ロメ和平合意、The Lome Peace Accord) を締結する。それ以降、混乱はあったものの、武装解除・動員解除が進められ、2002年1月には、カバー大統領により戦闘状態終結が正式に宣言されるに至った (落合, 2003, p.340)。

2. 紛争の特徴

本稿の焦点は、第二期を中心とする。そのことに留意して、シエラレオネにおける紛争の特徴を概観していく。

最初の特徴は、シエラレオネの紛争が、「ダイヤモンド紛争」であることである。隣国リベリアは、シエラレオネにおいて産出するダイヤモンドの密輸のための中継ポイントとなっていた。RUF はダイヤモンドを原資として武力活動を展開しており、紛争はダイヤモンド鉱山の支配権をめぐる縄張り争いという様相もあった (伊勢崎, 2003, pp.180-181, 188-189)。また、本稿の対象とする RUF に参加する「若者」は、ダイヤモンド採掘地域において露天掘りに従事しており、RUF は彼らを動員することにより、兵力を増強していった (Richards, 1996, pp.48-52, Reno, 1998, p.124)。

2つ目は、シエラレオネの紛争は「民族紛争」ではないことである。RUF の構成員はシエラレオネ全土から集められており、特定の民族に基盤を置く組織ではない (International Crisis Group, 2001, p.9)。また、ヒューマンライツウォッチ (Human Right Watch: HRW) によると RUF による村や市民に対する攻撃も、その民族や宗教とは関係なく行われたという (1998)。

3つ目は、紛争の拡大化である。これは兵士の増加と武装勢力の増加というふたつの要素がある。まず、兵士の増加について説明する。侵攻時の RUF は 100 名前後の少数の勢力であった。だが、その後、市民の誘拐あるいは自発的な参加により、兵力を増強している。一方、国軍もそれに呼応して人員を拡大している。RUF の兵力につ

いては不明だが、国軍に関しては、紛争以前の兵力は3-4000人であったのにも関わらず、1991年から92年の間（APC政権期）に、13000人程度、1993-4年（NPRC政権期）には、15,000-20,000人に拡大している（Peters, 2004, p.10）。このように拡大した国軍は、指揮系統の不備、訓練や設備の不足が生じ、統制を失っていく。その結果、国軍は略奪を繰り返すようになっていく（ICG, 2001, p.6）。

次に、武装勢力の増加についてであるが、紛争が経過するにつれ、国軍と反政府組織という武装勢力のほかに、さまざまな武装勢力が台頭した。そのひとつが民兵である。民兵は、統制の取れず、略奪を繰り返す国軍兵士やRUFの暴力から市民が自衛するために各地で組織された。その中でもカマジョーは、国軍を信用していないカバール大統領により重用され、第三期には民兵というよりも、カバール大統領の私兵として主要武装勢力のひとつとなっている。また、民間軍事会社EOや、外国からの介入アクターとしてのECOMOGも紛争に関った武装勢力のひとつといえる。

4つ目は、子ども兵⁽²⁾の扱である。RUFにおいて、子ども兵は、恐怖によりRUFにつなぎとめられ、単純なイデオロギーによって教化されている。前者に関しては、他人（時には、家族、隣人、友人）を殺さなければ、自分を殺すと言われ、殺人や暴力を強要されたり、上官からの恣意的な暴力を行使されたりすることが含まれる（HRW, 2000）。後者に関しては、サンコーをパピー（父さん）と呼ぶことを奨励させたり、キリストやマホメットになぞらえること（シンガー, 2006, pp.106-107）、上官やその他の兵士を家族とみなすように強要されること、「現政権は悪いやつで、市民はそれを支持しているから殺すんだ。」という単純なイデオロギーなどが含まれる（HRW, 2000, p.4, p.12）。

5つ目に、RUFは誘拐により兵士を獲得しているが、紛争が経過するにつれて、誘拐の対象が「若者」から子どもになったことがあげられる。誘拐による動員は、RUFの侵攻と同時に行われているが、第一期と第二期以後では、誘拐する人間の質に変化が生じているのである。RUFは、第一期には、自分たちは政府からの恩恵を受け取っていないと感じる「若者」を中心に誘拐しており、その中でもRUFの急進的なイデオロギーを受け入れる素地があったインテリ層（教師やヘルス・ワーカー、大学出だが無職の者）を重宝した（Richards, 1996, p.8）。だが、第二期以降では、子どもの誘拐が増加している（Ramgoolie, 2001, p.148）。研究者の推定では、RUFの兵士の半分が8歳から14歳であるというもの（Peters and Richards, 1998, p.186）、7歳から14歳の兵士が80%を占めるというもの（シンガー, 2005, p.32）がある。

6つ目は、兵士の流動性である。ゆるやかな組織化がなされている武装勢力において、兵士はその傘下を変えたり、新しい「小隊」を作ることがしばしば見られた。真実和平委員会によると、その傾向は、紛争の後半において顕著であるという（いつから後半かの記述はない）（TRC vol.2, 2004, p.36）。AFRC と RUF の結託も、その流動性のため、可能であったと考えることができる（RUF から国軍に人員が流れ、その人的コネクションにおいて結託が可能になったと考えることができる）。

7つ目は、市民に対する暴力である。民族紛争では、反政府組織の暴力は、他民族の市民に向けられるが、シエラレオネの紛争は民族紛争ではないため、民族や宗教に関係なく、広範に市民への暴力が展開された。だが、その特徴は時期により異なる。

第一期における暴力は、村の有力者や商人の殺害である。これは、リストを持って計画的に行われ、政府と関係があるものを殺害するという政治的な要素を持つものである。また、その際には略奪も行っている。一方、第二期以降の暴力は、過度の残虐性を伴い、政治的な意図が見られるとは思えないものである。第二期は RUF のゲリラ戦への転換をその始まりとするが、その暴力は、ゲリラ戦の中で行われた。ゲリラ戦の様子を松本仁一は以下のように述べている；

原野伝いに移動を続けるゲリラ部隊は重くてかさばる食料などは持って歩かない。腹がすくと手近な村を襲う。風方、十数人の兵士がブッシュに隠れ、こっそりと村に近づく。あと 10 メートルほどになると全員が立ち上がりて叫び声をあげ、AK47 を乱射しながら集落に突入する。住民は驚いて逃げてしまう。そのあと集落に入り、調理済みの食事を略奪する。部隊は住民が逃げて空き家になった家で 2、3 日暮らし、村の食料を食い尽くすとまた移動する。（2004, pp.17-18）

第二期には、村々を襲撃する中で、恣意的な略奪が行われ、レイプ、殺人、放火、身体の切断や拷問が行われた。特に、市民を拘束してその四肢や耳を無差別に切断する行為は、シエラレオネにおいて特徴的な残虐行為である。さらに第三期には、そのような村での暴力に加えて、略奪や恣意的な暴力を計画的に行うようになった。HRW によると、ECOMOG にフリータウンを追いやられた RUF/ AFRC は、1998 年緩やかに組織された「不生存者作戦 (Operation No Living Thing)」という、略奪、破壊、殺人を兵士の通り道すべてにおいて繰り返し、組織的に残虐行為を行うという作戦を行っていたという (1998)。また、1999 年の RUF/AFRC によるフリータウン襲撃の際、

暴力行為は、司令官の統制が必要とされるような組織的な形で行われ、上官が残虐行為を兵士に命令していたという。さらに、RUF 内で、残虐行為別に部隊を構成し、効率的に残虐行為を行った。その中には、住宅放火班、手切断部隊、殺戮小隊、無血殺害班（撲殺部隊）、全裸小隊（市民を全裸にしてから殺害）などが含まれる⁽³⁾ (HRW, 1999)。

本稿では、以上7点を、紛争の特徴として提示する。この7点のうち、1、2点目は紛争の前提となる特徴、3点目は、戦況の展開における特徴、4-7点目は、紛争の内実における特徴と位置づけることができる。次節では、このような特徴を踏まえて、先行研究におけるRUFをめぐる「若者」像を見ていくことにする。

Ⅲ. 「若者」をめぐる先行研究

シエラレオネの紛争がどのように解釈されてきたのであろうか。本節では、まず「若者」とは誰かを確認した後、①なぜ紛争は勃発し、なぜ「若者」はそれに参加したのか、②紛争において「若者」はどのように振舞ったか、という2点について、それぞれ先行研究を概観し、考察を加える。

1. 「若者」とは誰か

「若者」が社会の紛争の大きな要因のひとつであるという研究は、シエラレオネだけではなく、いくつかのサブサハラアフリカ諸国において存在する。その中で、「若者」は、一貫して経済的に社会から一人前と認められておらず、年配者に従属しなければならない存在として位置づけられている。つまり、「若者」とは、単に年齢によって規定されるだけでなく、社会的ステータスをも含んだ概念なのである。その観点からウェイス (Weiss) は、「若者」を「15歳から35歳までの所帯を持ったり、家を持ったりするほど自立をすることができない立場にいる人間」と定義し、場合により35歳以上の場合もありうると付け加えている (2005, pp.42-43)。つまり、「若者」を、子供ではないが、一人前でもない社会階層として捉えているのである。本稿もこの定義に準じることにする。

また、ベイカーとリカード (Baker and Ricardo, 2005) は、そのような「若者」は、資産を持ち、一人前であると認められている男性の年長者にコントロールされる存在であると述べている。よって、村において資産を持たず、地位も得ることができない「若者」は、村におけるヒエラルヒーから逃れるために、都市に向かい、そこで独自の社

会や文化を發展させ、達成可能な自分達なりの「一人前」を生み出し、独自のヒエラルヒーを構築するという。ベイカーらの描き出す「若者」とは、いわゆる「社会から排除された」結果、「独自の社会や文化を作り出した」存在だといえよう。

2. なぜ紛争は勃発し、なぜ「若者」はそれに参加したのか

(1) リチャーズによる議論

この問いに対して、シエラレオネをフィールドとする人類学者ポール・リチャーズ (Richards, Paul) は、著書『熱帯雨林のための戦い：シエラレオネにおける戦争、若者、資源』(1996)において、パトリモニアリズムという概念を用いて解釈を加えている。パトリモニアリズムとは、支配者が権力、財産、権益を独占し、それを私物化する一方で、支配者の私的隷属者からなる統治機構を整備して領土や人民を支配しようとする国家のあり方をさす。パトリモニアリズムに基づく国家においては私物化された国家機構や行政機構を通じて、富、地位、契約、雇用、権益、仕事といった様々な資源が上層から下層へ分配され、その代わりに、支持、忠誠心、服従などが下層から上層へと提供される (落合, 2001, pp.51-52)。

リチャーズによると、シエラレオネはパトリモニアリズムに基づく国家であり、市民は奨学金や保健衛生など社会サービスという形で資源分配の恩恵を受け、医者、教師を含む公務員は政治エリートからの補助金や米などの食料の臨時配分により恩恵を受けていたという (給料は生活できる額ではなかったという)。リチャーズは、このような国家が経済危機に直面したことが紛争の要因と見る。

経済危機は、一次製品の国際価格の低下と冷戦終焉による援助額の減少に引き起こされた。その結果、政治エリートから分配される資源が減少し、市民、特に「若者」の不満が高まったことにより紛争が勃発したという (Richards, 1996, p.36)。

また、リチャーズは、「若者」の不満が爆発する前提となる閉塞した状況も描いている。APC 政権は、紛争が始まる前に、ダイヤモンドに人員を割くため、安価なコメを輸入し、競争力の低い自国のコメ生産を窮地に追いやった。一方、都市部では、構造調整政策により、それまで補助金により抑えられていたコメの価格が上昇し、雇用も経済悪化で減少した (p.51)。このように、シエラレオネ農村の「若者」は、農村にいても学校にも行けず、仕事もない、その一方で、都市へ向かうという選択肢も立たれたという状況に直面していた。そのような中、「若者」は、手っ取り早く稼ぎを得ることのできるダイヤモンド採掘に従事したのだという。

そのような中に現れた RUF は、閉塞を打開する存在であったトリチャーズは描く。彼の描く RUF は、打倒政府というイデオロギーを持つ一枚岩の存在である。RUF の初期メンバーは、大学出の無職者や地方に左遷されたと思っている教師など、APC 政権の恩恵を受けることができなかつたインテリ層であり、彼らが、打倒政府という考えを共有した「若者」を誘拐し、イデオロギーを教え、蜂起に主導したという解釈をリチャーズは行っている。

(2) 武内による理論

パトリモニアリズムに基づく国家における紛争勃発のプロセスをリチャーズとは異なった形で解釈をしている議論がある。アジア経済研究所の武内進一は、論文「アフリカの紛争：その今日的特質についての考察」(2000)の中で、パトリモニアリズムに基づく国家における紛争の要因をパトロン＝クライアント関係という概念を用いて説明している。武内理論はシエラレオネの考察ではなく、サブサハラアフリカにおける紛争を一般化したものであるが、パトリモニアリズムと紛争の関係を考察するのに大きな洞察を与えてくれる。

パトロン＝クライアント関係とは、パトリモニアリズムに基づく国家における人間関係のあり方をさす。パトリモニアリズムに基づく国家において、資源の分配を自由にできる「政治エリート」は、ウェーバー的な意味での官僚に基づくのではなく、ビクマンやボスが占める個人化した地位になっている。彼らはパトロンであり、人々は国民であるという普遍的な属性ではなく、特定のパトロンと関係を結んだクライアントである限りにおいて資源の分配の恩恵に授かることができる。ビクマンは、中央から地方に至るまで、さまざまなレベルで存在しており、ビクマン同士でもこの関係が存在する。このような重層的ネットワークが張り巡らされ、そのラインにそって資源が流れていく。また、パトロンとクライアントは相互依存の関係にあり、パトロンがその地位を保つためには、クライアントをリクルートし、動員すると共に、絶えずクライアントに資源を分配し続ける必要がある(栗本, 2001, p.354)。いわば、「エリートたちは支持集団から資源の配分を迫る社会的圧力に日常的にさらされている」のである(高橋, 1998, p.47)。

武内は、このようなパトロン＝クライアント関係を用いて、紛争の要因を説明している。パトロン＝クライアント関係のネットワークは、紛争前は一党制の長期政権において政府の長が頂点となり、国家の中でひとつしか存在していなかったが、1980

年代の民主化の導入、経済の自由化により、利権が拡散し、何人かの政治エリートを頂点とするいくつかのネットワークが乱立することになった。そのような状況において、経済悪化がおこり分配するための資源が減少したことから、各ネットワークの頂点に立つ政治エリートは、資源を多く得るために、エリートの間で利権や権力をめぐる争奪戦を開始した。そのような争奪戦の中で、政治エリートは、パトロン＝クライアント関係のネットワークを、より大衆を巻き込む形に再編し、クライアントを動員した。クライアントを動員し、武力を用いた結果、武力紛争が勃発した。そして、その中で武器をとって暴力を用いる駒となったのは、「若者」であったという（武内，2000, p.36-37）。

（3）考察

武内の理論をシエラレオネに当てはめて考えてみよう。すると、シエラレオネのケースが、パトロン＝クライアント関係ネットワーク同士の戦いという構図にあてはまらないことに気づく。なぜなら RUF の指導者の中に「政府エリート」と位置付けられる存在はいないからである。落合は、「サンコーや RUF 指導部の多くは、もともと政治エリートでも、教育エリートでも、ビジネスエリートでもなかった。その多くは、教育水準も低く、定職さえない、およそ権力やエリート価値とは無縁な生活をしている人々に他ならなかった」と述べ、リチャーズが政府エリートという概念の代わりに、インテリ層という新しい概念をつくり、そこに RUF 上層部を「片付け」ることにより、武内のいうエリート主導の構図にあてはめようとしているのではないかという批判をしている（2003, p.350）。

つまり、武内理論では、政治エリート間での資源獲得競争と、クライアントの動員が紛争勃発の要因になっているが、RUF 上層部は、資源獲得競争にも、クライアントからの分配の圧力にもさらされてはいない。それは、紛争勃発時に RUF のメンバーは 100 人程度であり、そのメンバー数は紛争と共に拡大したこと、上層部に「政治エリート」がいないことから明らかである。

それでもなお、筆者は武内理論がシエラレオネのコンテキストにおいて考察の余地を残すと考える。なぜなら、紛争以前、シエラレオネでは、政府を頂点としたパトロン＝クライアント関係のネットワークが形成しており、「若者」もその中に取り込まれていたからである。

シエラレオネにおける紛争前のパトロン＝クライアント関係のネットワークは、①

長期一党独裁政権である APC 政権を中心とし、②伝統的な支配形態である首長 (chief) を取り込んで、③民族を超えた形、で形成されている (Pham, 2005, p.130)。シエラレオネにおいて伝統的な首長による支配体制は、独立の際、地方行政機構として国家機構に取り組み、制度化された。そして、政治エリートが選挙に直面した結果、首長と彼が支配する村 (chiefdom) の票を獲得する道具としてパトロン＝クライアント関係が利用された (Fanthorp, 2001, pp.379-384)。その結果、民族を超えてパトロン＝クライアント関係は形成され、首長は上からおりてくる資源を私物化し、雇用を含む資源を自己の裁量で配分した (International Crisis Group, 2003, p.17)。このように長期独裁政権である APC 政権が頂点となるパトロン＝クライアント関係のネットワークが形成されたのである。

また、シエラレオネにおいては「自分自身で自立できる人間なんていない、すべて人間は誰かに支援されている。」という言葉があるほどパトロン＝クライアント関係が日常生活の一部である (Fithen and Richards, 2005, p.122)、それは「若者」にとっても例外ではない。例えば、中等教育における学生の中には、将来の忠誠と支援や、休暇中にダイヤモンド採掘・農業・雑用係などの仕事をするを引換えに、パトロンから学費を得ている者もいた (中等教育は、学費の高さ、数の少なさ故、アクセスが限られていた)。だが、経済悪化によりパトロンが窮乏し、この関係が崩壊したことにより、学校からドロップアウトをした者が多数いるという (Peters, 2004, p.20)。

このように、シエラレオネでは国家と伝統社会が一体となったパトロン＝クライアント関係のネットワークが構築されており、紛争前は「若者」もそこに取り込まれていた。だが、経済悪化によりそのネットワークが再編を迫られ、「若者」が切捨てられたのである。

武内理論が、シエラレオネの状況と整合性を持つためには、RUF に対する解釈は以下のいずれかに該当しなければならない。ひとつめは「APC 政権を頂点とするネットワークの最下層にいる「若者」が、その恩恵を与えない政府に対する圧力をかけ、それが RUF という組織に体现された」という解釈である。つまり、クライアントからの資源分配圧力が、RUF という形で体现されたとみる見方である。この解釈は、リチャーズの反政府イデオロギーという政治的な動機を持つ RUF 像と親和的である。

もうひとつは、パトロンから見捨てられた「若者」が RUF という新しいパトロン＝クライアント関係というネットワークを発見し、経済的動機から RUF に加入したことである。だが、その前提として、RUF という組織の中において、資源が分配され

ている必要がある。

3. 紛争において「若者」はどのように振舞ったか

筆者は、紛争に加担する「若者」は、「社会から排除」された存在であり、「独自の社会や文化」を形成してきたと述べた。ここでは、「独自の社会や文化」に焦点をあてて三つの解釈を考察していく。

(1) アブドゥラーの理論：「ルンペン文化」に支配された RUF

ひとつ目の解釈は、アブドゥラー (Abdullah, Ibrahim) らの解釈である。ここでは、1998 年の論文「破壊への小道：シエラレオネ革命統一戦線の起源と性質」と、彼とパトリック・ムアナ (Muana, Patrick) の共同論文「シエラレオネ革命統一戦線：ルンペンプロレタリアートの革命」(Abdullah and Muana, 1998) の二つを参考にする。

これらの論文は、紛争に加担した「若者」をひとつの社会階層とみなしている。これらの論文によると、RUF に参加するような「若者」が属する社会階層を、主に男性の失業者あるいは失業しそうな若者が寄り集まった社会階層であり、マリファナ、暴力、犯罪が罷り通っている反社会的な文化を持っている階層とみなしている。アブドゥラーらは、その階層を「ルンペン階層」、そして彼らが持つ退廃的な文化を「ルンペン文化」と名づけた (Abdullah, 1998, p.207)。

ルンペン層は、1940 年代からフリータウンに形成されたポテ (pote) という失業している若者が集まる地域に起源を持つという。アブドゥラーらによると、1970 年代には、ルンペン文化が、フリータウンの中間層によって形成された若者文化と結びつき、いままでとは毛色の違う社会階層の若者がポテに流入したという。その中には大学生も含まれており、彼らがポテの中でリーダー的存在になっていった。彼らは、学生運動を媒体とし、ルンペン層の持つ政治的要求を表明するようになったという (Abdullah and Muana, 1998, p.174)。だが、より過激な集団が、学生運動に端を発して形成され、学生が淘汰され、ルンペン層の若者から自然発生的に生まれてきたリーダーが学生に取って代わり運動を展開するようになる。暴力と犯罪が罷り通るルンペン文化にいたリーダーは、政治的運動において政治家とのコネクションをつくった。政治家は、しばしば「汚い仕事」を彼らルンペン層に担わせていたという (Abdullah and Muana, 1998, p.176)。

また、ポテで形成された文化は、フリータウンと同じように失業した「若者」が

仕事を求めて集まるダイヤモンド産出地域においても共有されたとアブドゥラーらは述べる (Abdullah and Muana, 1998, p.179)。RUF の指導者サンコーもまた、地方のポテにおける政治運動から反体制運動を始めている (Abdullah and Muana, 1998, pp.176-177)。

アブドゥラーらは、初期の RUF が、村を襲撃する際、APC 政権に加担する人物を計画的に殺害する一方、政権に反対するような人間を動員し、彼らが RUF の上層部になったことを認めつつも、RUF のイデオロギーは「現状を打開し、経済的政治的問題を解決するには暴力に訴えるしかない」という単純で形骸化したものであり、RUF の本質は、ルンペン文化にあると見ている。RUF はダイヤモンド採掘地域で「若者」を兵士にしているが、彼らにとっての RUF の魅力は、リチャーズの言うようなイデオロギーではなく、ルンペン文化を共有していることであり、ダイヤモンド産出地域を支配したり、略奪を行うことにより得られる経済的な利益であったという。また、その反社会的文化のため、他の社会階層からの支持を得られなかったため、RUF は誘拐を繰り返すようになったという (Abdullah and Muana, 1998, pp.176-179)。さらに、アブドゥラーらは、ルンペン文化は、RUF の起源になっただけではなく、国軍への登用を通して、国軍にも蔓延したと述べている (Abdullah, 1998, pp.208-211)。

アブドゥラーらの RUF における「若者」に対する解釈は、以前より社会から排除され、独自の文化を形成する「ならず者」集団の中から RUF が誕生し、彼らは経済的利益を、暴力を用いて追求している、というイメージといえる。

(2) ファイセンとリチャーズの理論：平等主義を目指す「世俗セクト」

先述したリチャーズは、2005 年のファイセンとの共同論文「戦争の創造、平和の構築：シエラレオネにおける武装組織の連帯と動員解除」において、RUF に対する新しい解釈を提示している。この論文は、紛争第二期以降をその射程としているが、この論文によると RUF は、戦況の悪化により、反政府という政治的なイデオロギー色を薄め、「若者」を排除した既存の社会を拒絶し、既存の権力と戦いつつ平等主義的な共同体をめざす「世俗セクト」と呼べる存在になったという (Fithen and Richards, 2005)。

ファイセンとリチャーズによると、RUF は、平等主義的なイデオロギーを持っていたが、戦闘の中で強い軍事的統率を必要とする現状に直面し、平等主義の実現に失敗した結果、第二期には暴力に対するパラノイアを包含する組織になったという

(p.123)。ファイセンらによると、第一期において、RUFの上層部は、パトリモニアリズムに基づく国家から排除された「若者」を取り込み、平等な制度を構築することを夢見たという。RUFはそのイデオロギーに基づき戦闘を展開し、多くの自発的賛同者を得た。しかし、紛争が長期化し、その残虐さの噂が広まるにつれ、RUFの自発的加入者は少なくなった。その結果、誘拐をすることによって、兵士を獲得するようになったという。

ファイセンらは、RUFの中でも、そのような状況においてゲリラ戦を展開する「小隊」において形成された社会について注目をする。1992年から93年にかけて、RUFが国軍に追いやられた結果、平等主義がさらに強調され、自給自足の組織 (Survival Movement) ネットワークとして再編されたという。しかし、その結果、RUF上層部の権力は下まで及ばなくなり、いくつかあるRUFのキャンプにおける意思決定は、キャンプの司令官レベルにおいて行われるようになったという。「小隊」はそのキャンプをベースとし、何日も歩きまわりながら、ゲリラ戦を展開する存在である。ファイセンらはRUFの「小隊」を、上層部の平等主義的思想と、戦闘という現実の狭間に立ち、「独自の社会」を形成してきた集団と捉えている。そこでは、平等主義というよりも、「実力主義」的な社会が形成されていたという。「小隊」では、他の武装集団に構成員が転向するのを防ぐため、厳しい罰則（殺される場合もある）を用い統制され、個人の財産の所有は禁じられていた。その一方、薬をはじめ必要な物品は無料で支給され、略奪した金品は回収され再分配されたという (p.125)。さらに、成果さえ挙げれば、年齢に関係なく昇進できたという。また、1992年に、サンコーはRUF上層部における急進的イデオロギーを持つものを肅清し、平等主義を志す共同体におけるカリスマ的存在になったと述べている (p.125)。

ファイセンとリチャーズは、既存の社会を拒絶し平等主義を秩序とするが、現実には、それがゆがんだ形で支配している、いわば、理想構築に失敗した共同体というイメージを持っている。特に「小隊」は戦闘の現実や物資の分配により、厳しい「実力主義」により支配されていた。このようなイメージからファイセンとリチャーズはRUFを「世俗セクト」と規定したといえよう。

(3) マーフィーの理論：パトロン＝クライアント関係で成り立つRUF

一方、RUFは「既存の秩序」の虜であったという、上記とは反対の議論を展開している論文もある。マーフィーによる論文「リベリア、シエラレオネ両紛争における

軍事パトリモニアリズムと子ども兵クライアンテリズム」である (Murphy, 2003)。この論文は、「若者」と子供の概念を明確には使い分けず、両者の区別をあいまいで連続したものと捉えた上で「子ども兵」という言葉を用い、RUFにおける子ども兵は、パトロン＝クライアント関係に取り込まれていたと主張する。

この論文は、これまで論じられてきた「子ども兵は、強制的に、あるいは、正しい判断ができない年齢から武装勢力に動員され、安価な兵士として使い捨てにされている」という考え方を、紛争の社会経済的状況を無視しているとして批判をする。その上で、マーフィーは、RUFはパトリモニアリズムに基づく統治体系を形成し、子ども兵はその末端に組み込まれているという解釈を展開する。

マーフィーによると、紛争が勃発したことにより、武装勢力における様々なレベルの上官が、新しいビッグマンとして台頭したという。子どもは、上官をパトロンとし、彼らに忠誠心を使い、支配地域において市民から略奪した物品を上官に提供したり、武装勢力に忠誠を誓わない者を処罰したり、チェックポイントや支配地域の警備という形で上官に仕えたという。一方、パトロンから子ども兵に提供されるものは、物理的な資源ではなく、安全や保護、食料、生きるための手段（戦闘の技術や道具）であったという。

マーフィーの描く RUF 像は、既存の政府のパトロン＝クライアント関係というネットワークから排除された結果、新しいパトロンを RUFに見出した「若者」達（あるいは子ども達）というイメージといえる。

(4) 考察

3つの理論を順に考察していこう。アブドゥラーらの議論の評価できる点として、兵士の流動性や武装勢力同士の離合集散(特徴、6つ目。II-2参照)、民兵の台頭(特徴、3つ目の一部)、というシエラレオネの紛争の特徴に対して一定の説明をつけることができることがあげられる(落合, 2003)。流動性と離合集散に関しては、武装勢力に雇われた「若者」がルンペン層を出自としており、それぞれの武装勢力の中にいる「若者」とコネクションでつながっていると解釈することで説明できる。また、民兵の誕生理由も、国軍と RUF は暴力的な集団で、反社会的な文化を持つ「若者」から成り立っており、市民は彼らからの暴力に悩まされていたと解釈すると自衛のための民兵が形成されたと考えるのは自然であろう(落合, 2003)。このことから、アブドゥラーらの理論は、紛争の第一期から第三期まで一貫し、紛争の展開と整合性を持つと考え

られる。

だが、アブドゥラーらの理論の問題点も存在する。アブドゥラーらは、リチャーズと同じように、「若者」を「排除された存在」と位置づけた。だが、リチャーズと異なるのは、彼らをもともと社会から排除された存在と捉えていることである。筆者は、アブドゥラーらに対してひとつの問題点を指摘する；「アブドゥラーらは、「若者」たちを退廃的な人間であるという先入観を持っていなかっただろうか。」

アブドゥラーらは、ルンペン層において展開された運動を政治運動とは見ずに、政治運動という皮をかぶった暴力だと捉えている。だが、その運動に、政治性が完全になかったわけではないだろう。アブドゥラーらの論文には、リチャーズの強調するような政治的側面を極力排除し、暴力性を強調しようという先入観があるように思える（一方、リチャーズの議論では、「若者」という存在を社会から排除された、かわいそうな存在であり、彼らは、その現状を打開しようと政治的に蜂起するという「前向きな若者像」が、その先入観にあると考えられる）。

また、アブドゥラーらの議論は、ルンペン層の内実を考察していない。おそらく、アブドゥラーらは、あまりにも外から「若者」を見すぎているのだろう。アブドゥラーらの議論は「排除された若者」をすべてルンペン層に位置づけることで、彼らが紛争に加担したり、略奪を繰り返す理由は、単に「暴力的であるから」と単純に結論付けてしまう危険性を備えている。「若者」が、紛争や暴力に加担するのは、その理由があるはずだが、彼らの主張は、アブドゥラーらの議論には反映されていない。

アブドゥラーらの議論が、紛争に加担する「若者」の「文化」を外側から考察したものであると位置づけると、それを内側から捉えたのが、ファイセンとリチャーズによる論文、マーフィー論文である。

まずはファイセンとリチャーズの議論を考察する。彼らが RUF を考察している時期は、第二期直前から第二期である。この時期は、RUF が劣勢となり、ゲリラ戦に転向する時期である。彼らは、この時期、RUF は平等主義の性格を強めたと主張しているが、そのような切迫した状況で、戦闘の勝利をあきらめ、平等主義を志した社会を構築しようとするのは果たして論理的であろうか。この時期の状況をアブドゥラーとムアナはより現実的に捉え、ゲリラ戦への転換は RUF の生き残り戦略であり、政府との交渉機会を作ることを目的だとしている（当時の NPRC 政権は軍事的優勢のため交渉を拒絶した。だが、その後は RUF が優勢になったため交渉の姿勢は撤回した）。また、ファイセンとリチャーズの「RUF が組織の質の転換をはかり、既存のシエラ

レオネ社会を拒絶し、平等主義の社会を作ろうとした」という解釈は、サンコーの神格化を説明できない。なんのためにサンコーは神格化される必要があったのだろうか。

一方、RUF という組織が、新しいパトロン＝クライアント関係のネットワークを構築したと考えるマーフィーの議論は、サンコーの神格化を説明している。サブサハラアフリカにおいてパトロン＝クライアント関係の頂点に立つ者はしばしばカリスマ視されてきたからである。たとえば、サブサハラアフリカの国家においてパトリモニアリズムの頂点に立ってきた長期政権の像は「紙幣に顔が印刷され、写真は国中の事務所に飾られ…彼の言葉は法と同等の力を持つ」（堀内，1998）といわれているように、長期政権の指導者は多分にカリスマ視されている。

「サンコーが神格化されているから、パトロン＝クライアント関係が成り立っている」という議論はあまりにも短絡的であろう。しかし、サンコーが神格化されていることは、「RUF はサンコーの所有する武装組織である」というメンタリティが、サンコー自身また、RUF の「若者」たちにもあったのではないかと考えられはしないだろうか。

また、マーフィーの理論に依拠すると武内の理論が明快に説明できる。武内はパトロン＝クライアント関係により構成されたネットワーク同士の争いが紛争の内実であると考え、マーフィーの理論に立つと、RUF はパトロン＝クライアント関係のもうひとつのネットワークと位置づけることができるからである。

だが、マーフィーの理論はふたつの点でシエラレオネの実情と合致しない。ひとつは、RUF の上層部は政治エリートではないことである。ふたつ目に、パトロンからクライアントへの上から下への資源分配はなく、逆に、略奪を通し、資源は下から上へと上納されることである。

IV. 議論：RUF における「若者」に対する再解釈

－擬似パトロン＝クライアント関係という概念の提唱－

1. 分析枠組みの提示：擬似パトロン＝クライアント関係

筆者は、先行研究から RUF の「小隊」では、パトロン＝クライアント関係に近いが、それとは異なる規範に基づいて社会が形成されているという新しい解釈を提唱する。その「パトロン＝クライアント関係に近いが、それとは異なる規範」を筆者は「擬似パトロン＝クライアント関係」と名づけることにする。この概念は、以下の特徴を持つ；

- ①パトロン＝クライアント関係に基づいており、クライアントのパトロンを持つ必要があるという価値観に基づく。
- ②パトロン＝クライアント関係とは異なり、資源が上から降りてくるものではなく、むしろ、略奪によりクライアントから上納するものである。しかし、マーフィが指摘するように、その代償として、安全や保護、食料、生きるための手段（戦闘の技術や道具）がパトロンから提供される。
- ③パトロンは、富を分配することによって、クライアントからの支持を得るわけではなく、暴力やカリスマ性によって支持を得る。

筆者は、I節「問題の所在」において「紛争は、戦況や武装勢力上層部の意思決定、国際社会の介入など政治プロセスだけではなく、紛争を取り巻く社会の状況との相互作用にて展開するのでないか」という問題意識を述べた。果たして擬似パトロン＝クライアント関係という概念は、この問題意識に対して回答を与えることができるのであろうか。

本節では、戦況や武装勢力の行動、上層部の意思決定という紛争の「政治的」な展開を所与とし、紛争の特徴を、擬似パトロン＝クライアント関係を用いて説明することにより、この問題意識に対してアプローチを行う。本稿ではII節において、紛争の特徴を提示したが、このうち、「紛争の前提となる特徴」（1点目「ダイヤモンド紛争であること」、2点目「民族紛争ではないこと」）、「戦況の展開における特徴」（3点目「紛争の複雑化と拡大化」）を所与とし、4～7点目の紛争の内実における特徴（4点目：子ども兵の扱い、5点目：誘拐される市民が「若者」から子どもに変化したこと、6点目：兵士の流動性、7点目：市民への暴力）と擬似パトロン＝クライアント関係との整合性を考察することにより、問題意識にアプローチするものとする。その際、先行研究との関連においてどのように解釈されるのかについても留意し、シエラレオネの紛争についての新しい解釈を試みる。

2. 分析：「擬似パトロン＝クライアント関係」という概念は正しいのか

まずは、擬似パトロン＝クライアント関係がどのように形勢されたのかを考えていく。リチャーズのいう政府から排除された「若者」は、自発的であれ、誘拐であれ、RUFに加入した。だが、第二期に、RUFがゲリラ戦に突入したことにより、彼らは「小隊」で行動するようになる。それにより、キャンプとの接触は極端に減り、「小隊」に対

する補給は制限されたと考えられる（このような状況では、ダイヤモンドによる恩恵が一般の兵士までいきわたっていたと考えるのは、非合理的であろう）。そのような状態において、「食うに困る」ようになることで、RUFの「小隊」は、略奪を繰り返す存在になってしまったのではないだろうか。このような中、擬似パトロン＝クライアント関係は形成されていったと考えられる。

アブドゥラーは、RUFの「若者」に対して、ルンペン層という言葉を用い、以前より社会から排除され、独自の文化を形成する「ならず者」集団であるというイメージを持っていた。だが、略奪を繰り返すのは、彼らが退廃的で暴力的な文化を持っているからではなく、ゲリラ戦を展開し、歩き回っているため食うに困っていったからであると考えられはしないだろうか。そして、そのように略奪を繰り返すうち、RUFの「小隊」において、政治的なイデオロギーは表面的なものになり、経済的な動機が支配する状態になってしまったと考えられる。

ファイセンとリチャーズは、略奪した金品は、「小隊」において、上官が一度回収して、再分配する仕組みであるという。このような社会は、「実力主義」というよりは、むしろ弱肉強食に近いのではないかと筆者は考える。回収した略奪品は、上官に独り占めされ、パトロン＝クライアント関係の恩恵として再分配されると解釈するのである。そのように解釈すると、特徴の5点目、「RUFは誘拐による兵士を獲得しているが、紛争が経過するにつれて、誘拐の対象が子どもになったこと」に対し、説明を加えることができる。なぜなら、弱肉強食の世界において、「小隊」に対する支配を確立し、人員を自分の思うように動かすためには、子どもを使う方が合理的であると考えられるからである。つまり、パトロンに対して物理的な資源分配を要求し、一人前に考えることができる「若者」に対して支配を確立するよりも、子どもに対して支配を確立する方が容易いであろう。さらに子どもに対しては物理的な分配は最低限で済む。まして、イデオロギーを固く信じる「若者」は、そのような支配体制を確立するには邪魔な存在であったことが予想できる。

一方で、擬似パトロン＝クライアント関係においては、パトロンである上官は常に危機に脅かされる存在だと考えることができる。資源をクライアントから回収するという状態で、パトロン（上官）がパトロンたる所以が見当たらないからである。なぜなら、パトロン（上官）は資源を分配することでクライアント（一般兵）からの忠誠を得ているわけではなく、実力や暴力による支配でそれを得ているからである。しかし、弱肉強食の世界では、実力で上り詰めた座は実力で奪われる可能性があるため、

パトロン（上官）は、その座を常に脅かされる存在となるであろう。特に、特徴の6点目で示したように「流動性」の見られるシエラレオネの紛争では、「小隊」の離合集散が繰り返されている。これでは、いつクライアント（一般兵）にその座を奪われたり、「小隊」から逃げられるかわからない。

そのような状態において、パトロン（上官）はクライアント（一般兵）を徹底的に統率する必要があったのではないだろうか。このように解釈すると、特徴の4点目「子ども兵の扱い」、7点目「市民への暴力」についての説明も可能となる。4点目「子ども兵の扱い」として、パトロン（上官）は、他人（時には、家族、隣人、友人）を殺さなければ、殺すと命令したり、殺人や暴力を強要したり、恣意的な暴力を行使している。これは、「小隊」からの逸脱行動（新しく「小隊」を作ったり、上官の座をのっったりすること）を抑制する役割を担っていたと考えられる。

また、7点目「市民への暴力」も同様に、クライアント（一般兵）に対する逸脱行動の抑制の役割を果たしていたという解釈を与えることができる。パトロン（上官）は、クライアント（一般兵）の「裏切り行為」を抑制し、従属を徹底させるために、クライアントに暴力を強制したのではないだろうか。擬似パトロン＝クライアント関係では、パトロンがパトロンであるためには、暴力を用い、その力を保持するしかない。つまり、残虐行為をクライアント（一般兵）に強制させることにより、パトロン（上官）が恐ろしい人間であることを思い知らせ、クライアントを恐怖により支配しようとした結果が「市民への暴力」ではないかと考える。

「市民への暴力」は、村を襲う際の恣意的な暴力と、1999年のフリータウン侵攻時に見られる計画的な暴力とに二分することができるが、擬似パトロン＝クライアント関係において、パトロン（上官）がクライアント（一般兵）を暴力と恐怖により支配しようとするため市民へ暴力を振るったと考えれば、恣意的な暴力だけでなく、計画的な暴力にたいしても解釈を与えることができる。

このように一般兵に対して厳しい抑制を与える一方、クライアント（一般兵）に対し必要なものは提供し、満足のいく地位を与えるという懐柔策をも講じる。ファイセンとリチャーズは、第二期のRUFを、成果をあげれば地位が約束されるという「平等主義的な共同体」というイメージで捉えているが、その成果は、暴力によって示されている。つまり、暴力を用い、成果をあげたものが成り上がることができるのだ。これを、ファイセンとリチャーズは実力主義だと考えるが、これは、抑制ばかりでは裏切りが増すため、昇進という制度を取り入れ、裏切りを防ごうというパトロン（上

官)の懐柔策であると考えられる。

一方、上官は、子どもを支配するために、サンコーを「パピー(父さん)」と呼ばせたり、キリストやマホメットになぞらえたり、上官やその他の兵士を家族とみなすように強制したり、子ども兵に対して形骸化した政治的動機を述べたりしているが、それは「家族」という一次集団へ対する帰属の要求と、略奪の先には、政権の打倒という大きい目標があると見せかける役割を果たし、「小隊」の凝集を保つ役割をしていたと考えられる。つまり、暴力により「小隊」を維持し、「小隊」は家族という言葉やサンコーをカリスマと位置づける行動は、「小隊」を集団として統合するために用いられていたと考えることができる。

V. むすびにかえて

本稿では、紛争第二期におけるRUFの「小隊」にて形成される「社会」が、擬似パトロン＝クライアント関係により形成され、①略奪を目的とし、②そのために、「小隊」のメンバーを動員し、③連帯感を構築するために、「小隊」を家族に見立てたり、サンコーというカリスマを構築したり、政治的な言説を用いたりし、④その秩序維持のために暴力による支配を確立した、という特徴を持つと考えた。

本稿は、「紛争は、政治プロセスを追っているだけでは理解できず、紛争の展開は、それを取り巻く社会の状況と政治プロセスの相互作用にて展開するのではないか」という問題意識を提示した。本稿の目的は、紛争の中盤である二期を中心に、「若者」から形成されるRUFの「小隊」の社会を考察し、それに対して一定の解釈を与えることで、問題意識にアプローチすることである。

擬似パトロン＝クライアント関係がRUFの中で成立していると考えれば、政治プロセスだけでは説明できない紛争の特徴や展開に対しても一定の解釈を与えることができる。また、擬似パトロン＝クライアント関係は、紛争が展開する中で次第に形成されていったと考えるが、これも紛争が、政治プロセスと社会の状況との相互作用から成り立っていることに対して一定の解釈を与えるものであろう。

本稿はあえてRUFの兵士となった「若者」に対して焦点をあてたが、紛争の展開を考察するためには、政治プロセスを見る必要がある。そのためには、政治プロセスに対する考察も必要になってくる。よって、今後の課題として、政治レベルでの視点と、社会というレベルからの視点の相互作用を検証する必要がある。武力紛争の複雑性は、両方の交わるところで発展していくところにあるからである。また、本稿は、

RUFの「若者」という、社会の一部を見たに過ぎない。今後の課題として、RUFの「若者」を考察するだけでなく、他の武装組織（カマジョー、国軍等）、市民、難民等、紛争下におけるシエラレオネにおけるさまざまな「社会」を考察する必要がある。

本稿の主要参考文献の多くは、人類学者の考察である。よって、本稿の位置づけとして、人類学者の考察を用いて、紛争のメカニズムという「政治学」の対象とする事象を明らかにしたという点で意義がある。だが、筆者の懸念がひとつある。筆者は、擬似パトロン＝クライアント関係という概念を「発明」してしまったことで、シエラレオネの紛争の本質を誤解していったのではないかという点である。擬似パトロン＝クライアント関係は、いわば「アームチェア政治学」の産物である。よって、筆者は、この概念はシエラレオネの紛争に対するひとつの解釈であることを強調したい。

注

- (1) 西アフリカ諸国経済共同体（Economic Community Of West African States: ECOWAS）がシエラレオネの隣国リベリアの停戦監視の一環としてシエラレオネに駐留させていた停戦監視団。ナイジェリア軍により主導されていた。
- (2) 子ども兵の定義であるが、通常は18歳以下となされるものであるが、本稿の「若者」の定義が15歳以上となっていることから、それ以下の年齢をさす実際に戦闘に参加しているものと便宜的に規定される。だが、問題の本質を捉えるためには明確に定義を与えるためではなく、その組織における扱われ方により定義されるべきであると考え。本稿にて問題視するのは、動員された方法に関係なく（自発的に兵士に加わったものか、誘拐による強制的な徴兵かに関係なく）、子ども兵の扱われ方である。
- (3) 残虐行為別の部隊名は落合（2003）の訳による。

参考文献

- 伊勢崎賢治 (2003) 「資源が招いた紛争 シエラレオネ」 稲田十一・吉田鈴果・伊勢崎賢治 『紛争から平和構築へ』 東京：論創社.
- 落合雄彦 (2003) 「シエラレオネ紛争における一般市民への残虐な暴力の解剖学」 武内進一編 『国家・暴力・政治』 研究双書 534. 東京：アジア経済研究所.
- (2001) 「アナーキカル・ソサイエティ?：現代アフリカ紛争をめぐるイメージの諸相」 『敬愛大学国際研究』 第7号, 21-59頁.
- 栗本英世 (2001) 「民族・宗教・地位的对立の政治化と紛争」 総合研究開発機構 (NIRA)・横田洋三 共編 『アフリカの国内紛争と予防外交』 3部1章1節. 東京：国際書院.
- シンガー, P. W. 著、小林由香利訳 (2006) 『子ども兵の戦争』 東京：日本放送出版協会 (Singer, Peter Warran. (2005) *Children at War*. New York: Pantheon Books).
- 高橋基樹 (1998) 「現代アフリカの「部族」主義再考—経済的資源配分の観点から—」 『国際問題』 460号, 35-53頁.
- 武内進一 (2000) 「アフリカの紛争—その今日の特質についての考察—」 武内進一編 『現代アフリカの紛争：歴史と主体』 研究双書 500. 東京：アジア経済研究所.
- 堀内伸介 (1998) 「「新しい風」がわが国にもとめるもの」 『外交フォーラム』 121号, 34-35頁.
- 松本仁一 (2004) 『カラシニコフ』 東京：朝日新聞社.
- Abdullah, Ibrahim. (1998) "Bush Path to Destruction: The Origin and Character of the Revolutionary United Front / Sierra Leone", in *The Journal of Modern African Studies*. vol. 36, no. 236: pp. 203-236.
- Abudullah, Ibrahim, and Patrick Muana. (1998) "The Revolutionary United Front of Sierra Leone" in Calpham (ed.), *African Guerrillas*. Oxford, Kampala, Bloomington: Indiana University Press, pp. 172-193.
- Baker, Gary, and Christine Ricardo. (2005) *Young Men and the Construction of Masculinity in Sub-Saharan Africa: Implications for HIV/AIDS, Conflict, and Violence*. Social Development Papers No. 26, Conflict Prevention and Reconstruction Unit. Washington D.C.: The World Bank.
- Fanthorpe, Richard. (2001) "Neither Citizen Nor Subject?: 'Lumpen' Agency and the Legacy of Native Administration in Sierra Leone", in *African Affairs*, vol. 100: pp. 363-386.
- Fanthorpe, Richard. (2005) "On the Limits of Liberal Peace: Chiefs and Democratic Decentralization in Post-War Sierra Leone" Royal African Society. *African Affairs*. December. No. 105.
- Ferme, Mariane C. and Danny Hoffman. (2004) "Hunter Militias and the International Human Rights Discourse in Sierra Leone and Beyond" in *Africa Today*, vol.4, no. 50: pp. 72-95.
- Fithen, Casper and Paul Richards. (2005) "Making War, Crafting Peace: Militia Solidarities and Demobilization in Sierra Leone", in Richards (ed.), *No peace, No war: An Anthropology of Contemporary Armed Conflicts*. Athens: Ohio University Press, Oxford: James Curry, pp. 117-136.
- Human Right Watch(HRW). (1998) "Sowing Terror: Atrocities against Civilians in Sierra Leone", July vol. 10, No. 3 (A) [cited 3 Dec, 2006] Available from <http://hrw.org>; INTERNET.

- Human Right Watch(HRW). (2000) "Sierra Leone: Childhood- a casualty of conflict" AFR: 51/69/00 [cited 3 Dec, 2006] Available from <http://hrw.org>; INTERNET.
- International Crisis Group. (2001, April 11). *Sierra Leone: Time for a New Military and Political Strategy*. ICG Africa Report No. 28.
- (2003, September 2). *Sierra Leone: The State of Security and Governance*. IVC Africa Report No. 67.
- Murphy, William P. (2003) "Military Patrimonialism and Child Soldier Clientalism in the Liberian and Sierra Leonean Civil Wars", in *African Studies Review*. vol. 46, no. 2: pp. 61-88.
- Peters, Krijn. (2004) *Re-Examining Voluntarism: Youth Combatants in Sierra Leone*. (Monographs for the African Human Security Initiative. No. 100). South Africa: Institute for Security Studies.
- Peters, Krijn and Paul Richards. (1998) "Why We Fight': Voices of Youth Combatants in Sierra Leone". in *Africa*. Vol. 68, no.2: pp. 183-210.
- Pham, J. Peter. (2005) "Democracy By Force?: Lessons from the Restoration of the State in Sierra Leone". in *The Whitehead Journal of Diplomacy and International Relations*. Vol. 6, no. 1: pp.129-147.
- Ramgoolie, Monique. (2001) "Prosecution of Sierra Leone's Child Soldiers: What Message is The UN Trying to Send?", in *Journal of Public and International Affairs*, vol. 12: pp. 145-462.
- Reno, William. (1998) *Warlord Politics and African States*. Boulder : Lynne Rienner Publishers.
- Richards, Paul. (1996) *Fighting for the rain forest war, youth & resources in Sierra Leone*. Oxford: James Curry.
- (1998) "On Hunters & Martyrs" in Richards (ed.), *Fighting for the rain forest war, youth & resources in Sierra Leone*. (Rev.ed.). Oxford: James Curry.
- Truth & Reconciliation Commission (TRC), Sierra Leone. (2004) *Witness to Truth: Report of the Sierra Leone Truth Commission*. Vol. 2.
- (2004) *Witness to Truth: Report of the Sierra Leone Truth Commission*. Vol. 3A.
- (2004) *Witness to Truth: Report of the Sierra Leone Truth Commission*. Vol. 3B.
- Weiss, Tata. (2005) *Local Catalysis, Global Reactions, Cycles of Conflict in Mano River Basin*. (Monographs for the African Human Security Initiative. No. 116). South Africa: Institute for Security Studies.
- Zack-Williams, Alfred B..(1999) "Child soldiers in the Civil War in Sierra Leone" Paper Presented at the Development Studies Association Conference (12-14 September) University of Bath.

Understanding the armed-conflict in Sierra Leone from the view of “youth” combatants

<Summary>

Hideyuki Okano

In order to understand armed conflicts, is it enough to consider or analyze only political sphere of them including tactical situations, leaders' decision-making and interventions from the international society? This thesis suspects that the developments of armed conflicts are affected not only by a political sphere described above, but also by various societies in the areas which armed conflicts occur.

This thesis approaches the inquiry above by considering the society which is established in the rebel army, called Revolutionary United Front (RUF) during the armed-conflict in Sierra Leone. The beginning of this civil war is defined by incursion by RUF in 1991. Although, at that time, RUF consisted of approximately 100 persons, the conflict had experienced not only the expansion of RUF, but also expansion of national army, increase of armed actors and several changes of hostile or cooperative relations of the actors. Why such a development can be observed?

A lot of previous works analyzed this question from the political sphere stated above. However, armed actors employ lots of usual citizens for their combats and the behaviors have often been affected by them. Considering this fact, it is necessary to consider inner societies of the armed actors in order to understand the armed conflict.

Not only in Sierra Leone, but also in several armed conflicts, earlier studies point out the precariousness of “youth” to be factors of armed conflicts. Almost

all of these works depict them as those who are not children but financially not independent, not married and outcast from a society. It means that they are defined not only ages but also their social status. In this sense, previous works recognize them as one of social classes.

This thesis approaches to the development of the conflict by considering “youth”. Especially I focused on “youth” in RUF, because armed conflicts had been developed in line with rebel armies’ behaviors, and, therefore, the impacts of “youth” in RUF were considered to be most influential to the development of the conflict compared with societies of any other groups. Several works described ‘youth’ in RUF, but they are conscious of issues including “Why the conflict happens”, “Why they became soldiers”, “How they affected by the situations of the conflict” and “How the conflict affected ‘youth’”. None of works have not approaches to the question, “How ‘youth’ affected to the situation of the conflict”. This question is approached in this thesis.

This thesis suggest a new concept called “quasi-patron-client relations” for understanding “youth” in RUF through reviewing and analyzing previous works, and validate the concept by verifying whether the concept fit with the characteristics of Sierra Leone.